

おのきた

# 尾北校長室から

第14号



## 「四季」 ～ 秋を見送る前に

日ごとに秋が深まる時期となっている。折りしも今週は、生徒会主催の「**芸術の秋を楽しもう週間**」。少しずつ下がる気温に反比例する形で、これから3年生の受験対策は一層熱を帯びてくるし、1・2年生も中間考査が近づいている。そんな忙し気な時期を迎えるにあたり、あえて一息入れるべく、今回は季節をめぐる話をしてみたい。

早速だが、季節といえば、**日本は「四季」の国**である。私の子供の頃は、遊びや食べ物の中にも四つの季節が、今よりもはっきりあったように思う。

春、カラスのエンドウで「ピーピー笛」の音比べ、夏は蝉取りと海水浴、スイカ割り、秋にはどんぐりでコマ回し、栗ご飯、そして冬にはコタツでミカン…。時が経ち、遊びからは次第に遠ざかるようになり、スーパーでは年中いろいろな食材が手に入るようになって、いつしか私の中の季節感も少しずつ薄れていった。



日本に住んでいる私たちは四季が当たり前で、それが美しいと思うことも普段はない。しかし外国の人には必ずしもそうではなく、「**日本の四季は美しい**」ことを聞く。この四季について、このところ「**二季**」に近づいているのではないかと内心、心配している。暑さと寒さが極端で、まるでオセロゲームのように二つの季節が背中合わせで入れ替わっているような感じがするからである。

30年ほど前、アメリカ東海岸に1年間滞在する機会があり、驚いたことがいくつかあった。その一つが、この「**二季**」—— 四月初旬、マイナス気温が続いた日のわずか数日後、高層ビルから見下ろすセントラルパークの木々はモコモコと成長し、二週間ほどで緑の濃さとそのボリュームを一気に増していった。そしてすぐに高温の乾いた夏が急ぎ足でやってきた。ひとしきり太陽を浴びると、街は再び一気に枯れ葉色に染まり、私の一番好きな季節・秋は、訪れたかと思うとすぐに逃げるように駆け抜けていった。——この街では、四季ではなく「**二季**」であることを実感した。同時に、日本には四季があり、その移り変わりをゆっくり味わえることはありがたいことなのだ初めて知った。

気温で見れば、1年は確かに高低の二極であり、秋とはその高い時期から低い時期に向かう「つなぎの期間」である。日本は、季節がほぼ4等分されている珍しい国である。日本語には季節を表す表現がいくつもあり、季節に対する日本人の感性を思うのであるが、それは、「つなぎの期間」がたっぷりあるからこそ、季節の移り変わりをはっきり意識できるようになったからではないかと思う。



春 — 「**桜前線**」という言葉は、3月末から5月初めにかけて桜がこの国の大地の主演となる季節の呼び名である。秋 — たとえば、「**錦秋**」という素敵な言葉は、左の写真のように木々の紅葉が錦の織物のように色づく、10月から11月上旬の季節のことである。この時期にはまた、春先に北上する桜前線とは逆に、南下する「**紅葉前線**」という言葉もある。さて皆さんなら、暑さと寒さの「つなぎの期間」をどんな言葉で呼ぶだろうか？

なにはともあれ、秋本番。日本は二季ではなく、これからもずっと四季の**彩**を愉しむことができる国であってほしいと思う。今年もやがて去りゆく秋に感謝しながら、四季の国・日本に生まれてきてよかったと、つくづく思うこの頃である。